

平成25年(ワ)第38号等「生業を返せ、地域を返せ!」福島原発事故原状回復等請求事件等

原告 中島 孝 外

被告 国 外1名

2017(平成29)年3月21日

## 意見陳述書

福島地方裁判所第一民事部 御中

原告(T-3159) 佐藤 智

私は、2人の娘の母親です。

原発事故当時、夫と上の子、そして夫の祖父母の5人で、福島市で暮らしていました。私は下の子を妊娠中で、出産予定日は2ヶ月先の5月中旬でした。上の子は2歳になったばかりでした。

私は、下の子が産まれたら、上の子と同じように、タンポポや土筆の生えているあの道を歩いて、神社で手をあわせたあとは、ザリガニやオタマジャクシが隠れているあの田んぼのくぼみを覗いて…など、祖父母らが大切に受け継いできたこの地で、のびのびと子育てできることを楽しみにしていました。

そんな中、原発事故が起き、放射能から上の子とお腹の子を守りたくて、少しでも遠くに避難したいと思いました。しかし、このとき私は、切迫早産と診断され、安静が必要な状態でした。また、お腹の子は、まだ1700gでしたので、今、産まれてしまうと人工呼吸器管理が必要になります。未熟児を受け入れられる病院は限られておりますし、受け入れてもらえるかどうか分かりません。移動中に、車の中で破水したら、この子の命が危なくなります。水道もガスも復旧しておらず、大きな余震が続くなかでの避難は、切迫早産で治療していた私にとっては、したくてもできない状況でした。そして何よりも、情

報が錯綜していて何を信じていいか分からなかったため、避難を決断することができませんでした。その後、予定日より2週間早く、帝王切開で出産しました。

上の子のときには、何の躊躇もなく腕に抱き、母乳を与え、懸命に飲む我が子の姿を見るのが至福のときでした。

しかし、下の子のときは、被ばくしている自分の体から放射能が出ているかもしれないという不安を抱えながら授乳していました。放射能を与えてしまっているのではないかと恐怖を覚え、娘を咄嗟に突き放してしまっていることもありました。そんな気持ちを少しでも拭いたくて、粉ミルクを飲ませたこともありました。しかし、後になって、粉ミルクにも放射能が含まれており、無償交換しているというニュースを見て、愕然としました。

産後は、娘達を少しでも被ばくさせないように、夫を福島に残し、知らない土地で避難生活を始めましたが、夕方になると「ママ早く、パパのところに帰ろうよ。」「お家に帰ろうよ。」と娘に泣き叫ばれる日々が続きました。時間が過ぎるのをただじっと待つだけの避難生活の疲れから、夫に「あなたが放射能を全部消してよ！」とひどくあたったこともありました。避難先で、上の子が原因不明の呼吸困難を起こしたこともあり、もう限界だと悩んだ末、10ヶ月間の避難生活から福島に戻りました。

福島に戻ってからの生活は、娘達を極力被ばくさせないように、休みの日は、線量の低い山形に連れて行き、できなかった外遊びをさせました。そして、県や市のホームページで、食材の安全も欠かさず確認していました。福島県産のお米の安全宣言がされた翌月に、基準値超のお米が検出されました。流通はしていなかったとはいえ、流通していたらと思うと不安は拭えず、今も福島県産を避けてしまいます。福島は米どころです。命や暮らしを支えているお米から放射能が検出されたことは、あらゆるものが放射能に汚染されてしまったと絶望を感じさせるものでした。

毎朝、娘達の首にガラスバッチをかけてあげていましたが、本来であれば、必要のないものです。でも、だんだんハンカチやちり紙を持たせるような感覚になっていく自分にゾットすることもありました。

ホールボディカウンターの検査は、薄い検査着に着替えさせ、閉ざされた狭い空間に入ります。初めて検査をしたとき、娘は、「ママ、私に何をやるの?」と言わんばかりの表情でした。2歳の娘には、「じっとしているだけでいいから。」と何度も言い聞かせ、あやしながら行いました。嫌がる娘を狭い空間に入れての検査は、ロッカーにでも閉じ込めるような後ろめたい気持ちになり、娘に対して申し訳ない気持ちで涙が溢れました。

放射線被ばくに関する検査結果が届くたびに、ドキドキしていました。その後のニュースで、原発事故とは関係ないと言われると少しホッとする自分もいましたが、その根拠は極めて曖昧で納得できるものではありません。子どもの甲状腺検査の2巡目の結果が出て以降、原発事故の影響は、限りなくゼロに近いと説明していた専門家ですら、長期的に見ていく必要があると見解が変わってきているので動揺しています。

先月、2号機で最大650シーベルトの線量が推定されたというニュースがありました。650シーベルトは、広島の実験爆心の6倍もの線量に当たるそうです。今も大きな地震がたまに起きているので、自宅から60キロメートル先にこのような危険なものがあると思うと恐怖でしかありません。

私は、ここに住み続けていいのか、あの時、すぐ避難して福島ではないところで出産すれば良かったのではないかと、そして避難生活を続けていれば良かったのではないかと、と今も自問自答しています。

昨年のお正月、久しぶりに県外にある母の実家に親戚の子どもたちが集まり、「今度は、みんなで、〇〇〇ちゃん家に遊びに行きたい。」と言われ、娘は喜んでいましたが、小学生の子に「〇〇〇ちゃん家は放射能があるからダメだよ。」と言われていました。娘達は、黙ってうつむき、小さく頷いていました。その

時の娘達の表情は、目を背けたくなるほど悲しいもので、胸が締めつけられる  
思いでした。

原発事故から6年経過しておりますが、娘達は、このような境遇におかれて  
います。私の苦悩は今も続いています。原発がなければ、こんな辛い思いはし  
なかったと悔しい気持ちでいっぱいです。

以上